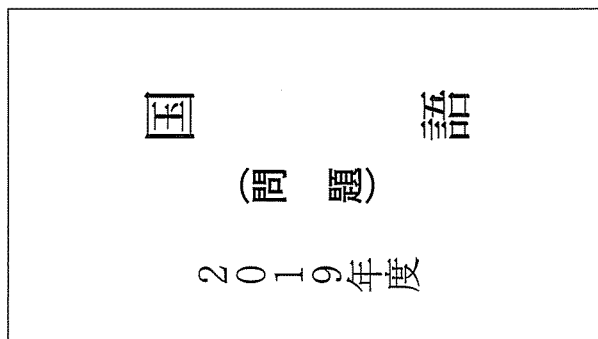




〈2019 H31132023〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	☒ 良い	☐ 悪い	☐ 悪い
マークを消す時	☐ 良い	☐ 悪い	☐ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)	3	8	2	5	番
	↓				
	万	千	百	十	一
		3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の A・B の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

明治初期は、日本の知識層の参照基準枠が、急激に中国文化から西洋文明へ移った時代である。早くも薩摩藩は薩英戦争（一八六三年＝文久三年）に敗れると、その直後に留学生を英国へ送っていた。下関で四国聯合艦隊に惨敗した（一八六四年＝元治元年）長州藩の反応もまた同じ。「攘夷」を旗印にして徳川幕府を倒した薩長政府も、権力を握って四年を出でず、政府指導者の大多数を欧米視察に送り出した（一八七一年＝明治四年）。「西洋モデル」のいわゆる「近代化」の過程は、明治政府の計画として始まり、旧武士層が、旧幕臣だと、薩長だと、また元何藩だとを問わず、ほとんど一斉にこれに和した。時流の急変と、その時流に投じての大合唱は、この時代の士族を——もし一般に日本人の全体をではないとしても——特徴づける。たしかに士族の叛乱はあった。しかし彼らには、国の未来へ向つての政治的計画がなく、より効率的な官僚政府によって鎮圧されるべきものであったし、事実鎮圧された。それは幕藩体制を脅かした農民一揆のように明治の権力を脅かすものではなかったし、自由民権運動のように権力のとつた方向とは異なる **a** を示すものでもなかった。

社会的変化の速さ、変り身の素早さ、基準枠の転換の唐突さは、一方で西洋人の知識や制度を全力を挙げて学習し輸入することを意味すると同時に、他方ではそれを消化するために受け手の側の状況や **b** とそれを関聯させる必要をも意味する。日本社会にとつての新しい秩序は、つくられなければならなかった。ナポレオン法典は訳されなければならず、資本主義と工業化は促進されなければならない。政治制度については、西洋の先進国が一樣でなく、絶対王制あり、立憲君主制あり、共和制あり、後発の国民国家が採った立憲王制にも、プロシヤ型官僚国家があり、イタリア型自由主義国家があった。「富国強兵」を目標とする指導者の多くが効率的であるとみなしたのは前者であり、「自由民権」派が主張した体制は後者にちかい。

しかし「西洋モデル」で変革を進めようとしたのは、旧体制のもとでの支配階級武士層であつて、体制を内側から揺がした農民ではない。世襲の身分制を廃しても（「西洋モデル」）、社会の「タテ構造」はできる限りそれを保存するはずであり（伝統的構造）、新しい思想と制度を採用しても、それと旧体制の「イデオロギー」＝儒教的価値体系との折り合いを、すなわち可能なかぎりでの新思想の旧体系への組み込みをもとめるはずであつた。しかもそれだけではなく、権力機構内外の知識人が大衆へ訴えるためには、新思想を従来の参照基準、その語彙や比喩を用いて、大衆の理解できるものにする必要もあつた。要するに新秩序の導人が急であればあるほど、旧秩序の活性化とその利用の必要も大きいということになる。

現にたとえば、幕府の青年儒者が一八六六年（慶応二年）に三十四歳で英国留学を志したとき、その上司を説得するために展開した議論はどういうものであつたか。中村正直の「留学奉願候存寄書付」は、「通天地人謂之儒」ではじまり、天の覆うところは中国だけでなく、地は西洋にもつづき、そこには西洋人が住んでいるのだから、「儒者分内の事」として西洋学も必要である、という。そのとき彼がほんとうにそう考えていたかどうかは、ここでの重要なことではない。重要なのは、儒と西洋学を関聯させることが、英国留学生を招ぶ当局を説得するのに、有効な戦術だと彼が考えていたということである。英国留学から帰った彼は、在留外国人の建言に仮託して、天皇の受洗の必要を説くところまでゆく（「擬泰西人上書」明治四年頃）。「受洗」が儒教的世界観と何の関係ももたぬことは、いうまでもない。

このような「西洋モデル」の **c** が内包する矛盾・相剋・妥協は、当時の文体にも、——というよりは殊に当時の文体に、その複雑な諸相として、しかし鮮明な特徴として、反映していた。

新しい概念は、それを定義しなければ、有効に用いることができない。殊に明瞭な定義なしに、外国語の概念を翻訳することはできない。また西洋の著者の多くには、中国や日本の著者とくらべて、みずから用いる概念を、はるかに頻繁に、はるかに明瞭に定義する習慣がある。したがって西洋の文献との広汎な接触は、日本人の側に西洋流の定義への注意を喚起したはずである。西周の『百一新論』（明治七年）はいう、

「議論ハ兎角、能ク辞ノ意味ヲ定メテ上下ノ文意ヲ論スルガ肝要デゴザツテ……」

「百教一致」を論ずるのも、まず、

「其教トイフ辞ヲキメテ掛ラネバ、……教ヘト指ス辞ヲ能ク箱ニ入レテ是程此大サナリトキメテ置カナクテハ跡ノ話シハ出来ヌコトデゴザル」

2

まず概念の定義、次にその概念を用いての議論、というこの考え方は、あきらかに西洋流である。彼の『百学連環 Encyclopedia』（明治三年開講）も、その「第一 総論」から、「英国の Encyclopedia なる語の源は……、即其辞義は……」という定義ではじまり、さらに學術の「学」および「術」の語の定義へと進む。また中江兆民の『三酔人経綸問答』（明治二十年刊）に、洋学紳士は、まず「進化」を定義して、

「夫れ所謂進化とは不定の形よりして完全の形に赴き不粹の態よりして精粹の態に移るを謂ふ是なり」

といい、つづけて動物の進化、人事の進化を例として挙げ、さらにその本題とするところの政体の進化に及んでいる。

もとより儒者にも定義の習慣が全くなかったわけではない。儒者の伝統は、古典の註釈であり、古典の註釈は、その主要概念——たとえば「仁」「性」「理」など——の意味を論じることを、中心とする。しかしそれは西洋流の定義では

ない。儒者の定義は、議論の前提ではなくて、本体である。その定義の基準は、意味論的事実と概念的道具の有効性ではなく、したがって価値判断から独立したものではなく、むしろ価値判断そのものの表現であり、著者の立場の宣言である。議論の **d** としての定義の習慣は、儒学の伝統のなかにはなかった。それが日本文のなかに入ってきたのは、明治初期においてであり、西洋文の影響のもつとも基本的な部分を代表する。

概念相互の関係を明示するのは分類である。あるいは、分類が **e** の表現であるといつてもよい。修辞法における分類の概念の代表的な表現形式は、列挙である。列挙のし方には、たとえば「理由は四つある」といってそれぞれを列挙する場合と、はじめに項目の数を示さずいきなり列挙するものがある。またそれぞれの対象に番号を附けず並列する場合、「一つ何々、一つ何々」と算える場合、「第一何々、第二何々」というように、列挙の順序を明示する場合がある。第一のやり方は、何語の文章にも多く、第二のやり方は日本語の文章にあつて、西洋の文章にはおそくない。西洋で頻りに用いられ、日本で稀であつたのは、第三のやり方である。したがって第三のやり方、すなわち第一にしかじか、第二にしかじかという修辞法の出現は、西洋の文章の影響とみなすことができる。それは同時に概念の分類の意識化をも意味していたにちがいない。

西岡はオーギュスト・コントの例にならい、学問を分類した（『百学連環』）。またたとえば「記性之理法」を二分して、「印象之理法」と「観念性之理法」とし、さらに前者を細分して四項とし、後者を細分して三項とする。細分の各項を列挙して、「一曰印象之本質……、二曰印象之漸減……、三曰印象之強弱……、四曰特殊官能有特殊記性……」と書く（『生性割記』明治十七年起稿）。これは漢文であるが、あきらかに西洋の分類記法の影響である。

山田顕義は兵制についての「建白書」（明治六年執筆か）において、工兵の体制が国によつて異なることを述べ、「此隊数ヲ区分スレバ、第一各国用兵ノ景況ニ関シ、第二自国ノ地形、第三物資ノ會計ニ依ルナリ」といい、「之ヲ分賦配置スル、第一地形、第二時勢、第三物貨會計、第四其地ノ人口ニ依ル」とする。徴兵のし方も国によつてちがう。「徴兵ノ法、第一国体、第二會計、第三自他ノ国況、第四當時ノ用兵術ニ関ス」。——この列挙のし方も、西洋の影響なしにはあり得なかつたらう。

このような哲学または技術的分野における分類の意識化は、また新聞の論説にまで及んでいた。たとえば福地桜痴の「人權の弁」（『東京日日新聞』明治十年十二月十二・十三・十四日）は、その典型的な例である。すなわち「人世ノ社会ニアルヤ、須臾モ離ルベカラザルハ夫レ人權乎」ではじまり、人權の内容を大別して、「（第一）身命保安ノ權利、（第二）榮譽保有ノ權利、（第三）身体自由ノ權利、（第四）奉教自由ノ權利ノ四項」とする。「此ノ人權ノ伸縮」（その実現の程度）を観察するには、まず英米二国が高点に達し、徳川時代の日本が低点にあつたとして、「第一ニハ維新以後ニ於テ何等ノ進取ヲ今日マデニ成シタルカラ証シ、第二ニハ将来ニ於テ又何等ノ進取ヲ要スベキカラ視ント欲ス」という。その後、人權の内容四項の（第一）から（第四）までを、個別に詳説する文章がつづく。ここでは文章の内容が西洋近代の思想を説くばかりでなく、その叙述の形式もまた西洋流に従う。明瞭な「人權」の概念は、東アジアの伝統文化にはなく、整然たる列挙により概念を秩序づける形式もまた、そこにはなかった。内容・形式共に西洋から来たのである。

（加藤周一「明治初期の文体」による）

注 中村正直（一八三二—一八九一）……明治時代の啓蒙思想家、教育者。

中江兆民（一八四七—一九〇一）……自由民権運動を主導した明治時代の思想家、ジャーナリスト、政治家。

オーギュスト・コント（一七九八—一八五七）……「社会学の父」と称されるフランスの哲学者、社会学者。

山田顕義（一八四四—一八九二）……日本の近代的法典整備に取り組んだ明治時代の政治家。

福地桜痴（一八四一—一九〇六）……明治時代の新聞記者、小説家、劇作家。

B

或曰ク、先生ニハ平素ヨリ百教一致ト云フ説ヲ御主張ナサルト承リマシタガ実ニ左様デゴザルカ。

先生対デ曰ク、如何様左様デゴザル。敢テ主張ト申スデハゴザラスガ、彼此ト考ヘ合セテ見候ヒツルニ、如何ニモ一致ノ様ニ存ゼラル、故、朋友ト話ノ序ニサル事マデ論シタ事ガゴザルニ由テ、大方世間デソレヲ拙者ガ主張スルト申スデゴザラウ。

然ラバ御説ノ一致ト申スコトラ承ハリ度イモノデゴザル。僕ナドハイト浅見陋識デ候ヒツル故ニ皆区々ノコト、思ハレ、如何ニモ一致トハ申シ難キカニ存ゼラル、デゴザル。今ノ世デ申サバ、御国ニテハ神道ト云フ教ガゴザリ、漢土ニハ孔子ノ教、又老荘ノ教、其一変シタ所デハ道家ノ教ナドガゴザルト承リ、又天竺ノ古教ニハ婆羅門ノ教ガゴザリテ、又釈迦ノ教ガ興リ、今ハ本土ハ婆羅門ガ再ビ行ハレ、釈迦ハ反ツテ本土ニハ行ハレズ、西藏、韃靼、漢土ヨリ反ツテ御国ナドニコソ行ハルレ。若シ教ガ一致ノモノデゴザルナラバ盛衰モ隆替モナイ訳デハゴザラスガ。又天竺ヨリ西ノ国々デハ回々教ト云フ教殊ノ外盛デ、土耳其、百見沙ナド此教ヲ奉スルト承ハリ、又西洋ト云フ国々デハ邪教、邪宗門トイフ者ガゴザルサウデ、切支丹トカ、破天連トカ、以留滿トカ申シテ専ラ魔法ヲ行ヒ夏モ雪ヲ雨ラセ、冬モ花ヲ咲カセルナド、色々不思議ナ術ヲ行ヒ、ソレデ其術デ人ノ国ヲ奪ヒ其教ヲ弘メルコトヲ専一ト致スト承ハリテゴザルガ、何ト左様ナ魔法遣ヒノ外道ナドデモ一致トイハレマスモノカ。マダ其上ニ其外ニモ猶太ト申ス宗旨モアリ、又其切支丹トイフ宗

旨ニモ羅馬教、希臘教、アリアン教、耶蘇教ナド、色々宗派ガ分レテゴザツテ、調度儒道ニモ朱子、陽明、徂徠ナドノ差別ガアリ、仏法ニモ八宗十宗ナドノ宗派アルガ如ク、左スレバ百教千岐トハ申サルベクトモ一致トハ言難カラント存ゼラル、ニ、先生衆ニ違ウテ一致ト申サル、ハ其説ヲ承リ度イコトデゴザル。

左様デゴザル。足下ノ言ノ如ク其名目ヲ枚挙シテハ、此上ニモ猶數々ゴザツテ更僕モ尽シ難ク、又其名目ガ替ルダケニハ、何レノ教モ替リガアリテコソ左候ラヘ。サレド其異ナル所ハ兎モ角モ、其趣ヲ考フレバ誠ニ同一ナルコトガゴザルニ因テ一致トハ申スデゴザル。サルニ議論ハ兎角、能ク辞ノ意味ヲ定メテ上下ノ文意ヲ論スルガ肝要デゴザツテ、徒ラニ己ガ見ル所ヲ主張スル斗リテ題目ノ是非ヲ細カニ玩味スルコトガナクバ、所謂水カケ論ト云フモノデ、何方ガ善イカ悪イカ分ラヌモノデゴザツテ、最ハ声ノ高イノカ弁舌ノ能ク廻ルノガ勝タ様デゴザツテ、真ノ是非ガ別ルモノデハゴザラヌ。今僕ガ百教ト指ス中ニハ成程足下ノ挙ラレタ種々ノ教ガゴザルコトナレド、徒ラニ左様ニ掲ゲタル斗リニテハ別リ兼ルコトデ、先ツ百ノ字ハ凡百トツベイト、総テナベテノ教ト見ル添辞ナレバ別ノ論ヒトモゴザラヌガ、教ト指ス辞ニハ種々ノ意味ヲ含ミタル字ニテ、左様ニ一朝一夕ニハ論ジガタウゴザル。又句尾ヲ一致ト申スハ百教ト申スヲ受タル訳デ、足下ノ言ノ如ク素ヨリ千差万別ノ教アレバコソ百教トハ申シタレ。又其百教ノ趣キ極意ノ所ヲ考フレバ、同一ノ趣意ニ帰スレバコソ一致トハ申シタレ。若シ百教ガ百致、一教ガ一致ト云フコトナラバ誠ニ揭示スルニモ足ラヌコトデ、一ツハーツ、百ハ百、水ハツメタイ、火ハ熱イト云フト同ジコトデ、三歳ノ小兒モ能ク知ルコトデハゴザラヌカ。

如何ニモ先生ノ言ノ如ク、一教ハ一致ナルコト論ヲ待タネバ、ソレガ積リテ百教ハ百致ナルコトモ亦知レタコトデゴザル。サレドモ百教ガ一致トハマダ僕ニ別ラヌコトデゴザレバ、其一致ノ所ヲ承ハリタイノデゴザル。サレドモ前ニ言レタニハ、教ト指ス辞ニハ種々ノ意味ヲ含ンデ一朝一夕ニハ論ジ難イト言レタガ、其教トイフ辞ノ意味ヲ承ハリ其字ノ意味ヲ定メテ段々ニ承ハリ度イノデゴザル。

サレバ其教トイフ辞ヲキメテ掛ラネバ同ジ水ガ冷イト申シテモ井戸ト水道ニハ替リガアリ、同ジ火ガ熱イト申シテモ炭ノ火ト蠟燭ノ火トデハ強弱ノ差ガアルデゴザツテ、教ヘト指ス辞ヲ能ク箱ニ入レテ是程此大サナリトキメテ置カナクテハ跡ノ話シハ出来ヌコトデゴザル。マヅ其教ト云フ辞ノ心ハ、素読ヲ教ヘルモ手習ヲ教ヘルモ、又ハ劍術柔術端唄三味線ヲ教ヘルモ皆學ブ人ガアリテ、其道ヲ授ル者ガゴザレバ教ト云フデゴザルガ、茲ハソレトハ差ウテ專ラ人ノ人タル道ヲ教フルヲ指シテ云フノデゴザル。サレバ孟子二人ノ道タル飽クマデ食ヒ、煖カニ衣テ居ラ逸ンジタ上ニ教ガナクテハ禽獸ニ近イカラ、堯舜ガ契トイフ人ニ司徒ト云フ役目ヲ申シ付テ、五教トイウテ **f** ノ間ハ親ト睦マジク懇ニセヨ、君臣ノ間ハ **g** ヲ立テ筋ノ違ハヌ様ニセヨ、 **h** ノ間ハ睦ジクシテ狎々シクハスナ、長幼ハ長ハ敬マヒ幼ハ憐レシ **i** ノ乱レヌ様ニ、 **j** ハ信ヲ本トシ偽リノナイ様ニセヨナド、アリテ、是レハ書經ニ見エテ、教ノ条目ハ其時ノ習ヒニ依ルコトナレバ爰ニハ論ゼズ、教トイフ字ノ意ハ其処ノ意味ニ見タクゴザル。又易ニ聖人神道ヲ以テ教ヲ設クトアリテ神道トハ如何ナル物カ確ト承知イタサネド、觀化ノ象ニ取リテ言レタ辞ナレバ、其教ヲ設クト云フモ今イフ教ノ意ニ協ウテゴザルガ、何ニモセヨ人タルノ道ヲ教フルコトヲ指シテ專言ニ教トイヒ、後々名教ナド、熟シテ仁義忠孝ナドノ名ヲ設ケテ教フルコトヲ指シタモ、矢張今イフ教ノ意デゴザル。

(西周『百一新論』による)

注 浅見陋識……考えが浅はかで知識が足りないこと。 更僕……教え上げること。 觀化ノ象……教え導くさま。

問一 Aの文章における空欄 **a**、**e** に入る語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、解答欄にマークせよ(ただし同じ記号を二度以上用いてはならない)。

イ 論理的要請 □ 概念的秩序 ハ 文化的伝統 ニ 社会的変革 ホ 政治的方向

問二 Aの文章の傍線部1「新秩序の導入が急であればあるほど、旧秩序の活性化とその利用の必要も大きい」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 伝統的構造が転換されたのは支配階級武士層が求めたからであって、新しい思想は従来の語彙や比喩で語られることによってむしろ活性化した。
- 「西洋モデル」を「タテ構造」の中に保存するには、世襲の身分制との折り合いをつけることによって、それらを社会に対置するしかなかった。
- ハ 新秩序を導入するためには、従来の参照基準をもちいて大衆が理解できるよう説明する必要があり、その意味で旧体制の利用価値も大きかった。
- ニ 西洋人の知識や制度を学習して「西洋モデル」による変革を急速に進めるには、権力機構内外の知識人との交流を目指す以外に方法がなかった。
- ホ 儒教的価値体系を近代社会から放逐するには新しい思想と制度を導入する必要があったが、近代的変革にはむしろ旧秩序の活性化が求められた。

問三 Aの文章の傍線部2「まず概念の定義、次にその概念を用いての議論」というこの考え方は、Bの文章の「或」の発言ではどの箇所に該当するか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 其教ヲ弘メルコトヲ專一ト致スト承ハリテゴザル
- ロ 百教千岐トハ申サルベクトモ一致トハ言難カラシ
- ハ 其百教ノ趣キ極意ノ所ヲ考フレバ、同一ノ趣意ニ帰ス
- ニ 其教トイフ辞ノ意味ヲ承ハリ其字ノ意味ヲ定メテ段々ニ承ハリ度イノテゴザル
- ホ 教ト指ス辞ニハ種々ノ意味ヲ含ミタル字ニテ、左様ニ一朝一夕ニハ論ジガタウゴザル

問四 Bの文章の傍線部3「若シ教ガ一致ノモノデゴザルナラバ盛衰モ隆替モナイ訳デハゴザラスカ」という発言は、どのような考えに基づいたものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 百教一致とは、あらゆる宗教が同一であると誤解したことによる。
- ロ 百教一致とは、言葉の概念を定義できていないと誤解したことによる。
- ハ 百教一致とは、古今の宗教を論じなければならぬと誤解したことによる。
- ニ 百教一致とは、名目を列挙していない考え方であると誤解したことによる。
- ホ 百教一致とは、東洋と西洋の相違をわきまえていないと誤解したことによる。

問五 Bの文章における空欄 f j に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| イ | f | 兄弟 | g | 義理 | h | 母子 | i | 次序 | j | 師弟 |
| ロ | f | 父子 | g | 情愛 | h | 夫婦 | i | 言辞 | j | 朋友 |
| ハ | f | 兄弟 | g | 義理 | h | 母子 | i | 言辞 | j | 師弟 |
| ニ | f | 父子 | g | 義理 | h | 夫婦 | i | 言辞 | j | 朋友 |
| ホ | f | 兄弟 | g | 情愛 | h | 母子 | i | 次序 | j | 師弟 |
| ヘ | f | 父子 | g | 義理 | h | 夫婦 | i | 次序 | j | 朋友 |

問六 Bの文章の傍線部4「其処ノ意味」が具体的に指し示すものは何か。傍線部4より前のBの文章中から十字で抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点も一字に数える）。

問七 AおよびBの文章の趣旨と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ Aの文章では、明治初期に西洋文明の知識や秩序が導入された際、それを早く消化し、伝統的構造と折り合いをつけるために旧秩序の活性化や利用が図られたと述べている。その例証として、Bの文章では、儒学の道徳観を利用して西洋の思想宗教の様々な特徴を説明するという大衆向けの修辞法が示されている。
- ロ Aの文章では、明治初期に西洋の知識や秩序が新たな価値基準となった際、その正当性を保証するために、概念規定と、概念の相互関係を明示する分類の意識化が行なわれたと述べている。その例証として、Bの文章では、世界の宗教を分類したり、儒学を構成する道徳観を分類列挙することの有用性が説明されている。
- ハ Aの文章では、明治初期に西洋文明の知識や秩序を有効に用いるために、まずその概念を定義する習慣とそれに則った修辞法がもたらされ、それが日本語の文体の変革を促したと述べている。その例証として、Bの文章では、諸種の異なる宗教の特徴から、宗教そのものに共通する意味を規定し、議論の前提とする論述方式が示されている。
- ニ Aの文章では、中国文化に代わって西洋文化が秩序の基準となった際、従来の価値基準である中国文化を相対化する形で西洋文化の必要性が説かれたと述べている。その例証として、Bの文章では、世界の様々な価値基準を「百教」という用語で相対化し、さらに「百教の一致」によって必要な秩序が統一されるとの考え方が示されている。
- ホ Aの文章では、旧来の中国文化の秩序の基準は、価値判断そのものの正しさに拠ったものであったが、それが、明治初期において西洋式の意味論的な概念を規定する方式に移ったと述べている。その例証として、Bの文章では、世界の宗教の特徴を列挙し、その共通の意味から、儒学より西洋の近代思想が有用であるとの判断が示されている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私は、ひろく同世代の多くの写真家たちがアメリカへ行き、ヨーロッパ、あるいは遠くアフリカ、ラテンアメリカへ出掛けて撮ってくる写真に感動させられることがほとんどない。

むしろ、それらの写真には、私がまだ見たこともないアメリカ西部の広大な平原と眩い太陽の光とそこに生きる人々の荒々しくまた明るい顔が写されており、その土地の独特な自然と事物のあり様が刻印されている。だが、私はすぐにあれこれの土地、あれこれの場所に出向いてゆくならば、ただその気になりさえすれば、そのように人々は生き、事物は存在しているのだらうと、一気にすべてを〈了解〉してしまうのだ。そしてすべて〈了解〉されたものは、すでにそのことによつて私を驚かしはしないし、むしろ驚かすことなどあろうはずはない。私は急速に、それらの写真とそこに写されてあるものに無関心になつてゆく。あまりにも当然すぎるではないか、いつだつてそれらの写真を前にして感じるのとはそのような白々しい思いである。だが、これは私だけがもつ偏見であらうか。

イ

一言でいってしまえば、これらの写真には一様に、旅行者だけがもつ甘えた感傷とそれと裏腹にあるつきなみな、希釈された好奇心がべつたりとはりついているということなのだ。たしかに旅行者は、自由である。彼はなにに対しても常に驚く曲がり角へと徘徊する。旅行者は一時的に与えられた自由にめまいを起こして、世界中を走り回るのだ。そのとき、彼は自由という名の不在者である。

こうして撮影された膨大な写真は、ここではないどこかを潜在的に希求する無数の人々に、ある種のロマンティックなものの残影を与えてやることぐらいはできるかもしれない。ただそれだけのことである。アメリカやヨーロッパやどこかで、このような多少でも気のきいた写真を撮った写真家たちが、ここ、この日本に帰つてくると何もできなくなり、そのまま消えていつてしまった例を、われわれはいくつも知っている。だがそのような写真家を批判したりすることが、ここでの問題ではない。おそらく、外国を旅する写真家は、異国への憧憬とロマンティズムによつて、その眼球に不透明なベールをかけられてしまうのだ。それゆゑに彼は世界を見ることもなく、同時に〈私〉を見ることもできなくなつてしまうのだ。そして、そのような中で写真家の行為が残すものは、さきに私がちよつとふれたエキゾティシズムというもうひとつの〈遠近法〉によつて切り取られた、〈世界〉も〈私〉も不在の文字通りの世界の抜け殻だけだ、ということも理解できるかもしれない。旅行者たる写真家は、一瞬一瞬をエキゾティシズムに駆られながら走り抜けてゆく

Ⅰ

か、あるいはひとつの国、ひとつのまち、あるいはその習俗にフェティッシュにこだわり続けるディレクタントであるかの二者択一を迫られるようだ。

ロ

だが、重要なことはそのどちらであるにせよ、〈世界〉と〈私〉との不断の緊張からの逃亡という意味では結局同じことであらう。一方はスペクタクル（光景）としての世界に目を奪われて〈私〉を忘れ去った者、もう一方は世界に、事物に〈私〉を投影し、その中に〈私〉をメッキヤクさせたいと願う者——そのとき、彼個人にとってそれらの事物ひとつひとつは彼の〈私〉自身にはかならない——という意味において。

ハ

たしかに、旅には私たちが「夢中」（文字通り、夢の中に置く）にさせてしまうなにかがひそんでいる。そして、いまなお旅が魅惑的であるとすれば、いま、ここに位置づけられて生き続けている〈私〉をここではないどこかに一時的にでもせよ連れ去り、もうひとつの〈遠近法〉を、つまりはもうひとつの仮想の生を生きるチャンスを与えてくれるかもしれないぬという淡い期待があるからにはかならない。それは、私ではないだれかへの変身願望に、あるいは苛酷な現実からの逃避としての母への²タイナイへの帰郷願望と、遠くどこかで結び合っているのかもしれない。だとすれば、それは本能構造に関わるものであり、それ自体を非難することはみずからの存在そのものを抹殺することになるだらう。

二

それにしても、旅という言葉がもつ響きはなんと魅惑的であることか。旅はおそらく旅行ではないだらう。旅行には何かの目的があり、その目的のためにやむなくやらなければならないものだ。目的達成のための過程は、それ自体として意味があるわけではない。ときには不必要なものですらあるだらう。だが、旅は本来具体的目的をもつものではない。旅にもし意味があるとするならば、旅してゆくそのプロセスのひとつひとつ、そしてその総体であらう。ある街からもうひとつの街へ、ひとつの土地からあの山脈を越えた向うの土地へ、要するに、〈世界〉を過つてゆく、その日付とともにあるプロセスのひとつひとつ、他者と偶然に出会い、その出会いを通じて突如〈私〉が解体し、新たな私が再生する、その絶えることのない自己超越の全プロセスが旅なのだ。

ホ

それでは旅の最終着点はどこにあるのか？ それはあまりにも不毛な問いであらう。それは、人が生きる生の最終目的は何かを誰何するに等しい。答えはナイ。人は生きるために生きるのだ。同様に人は旅するために旅するのだ。われわれは、けつして旅していると意識することなく旅することもできるのだ。われわれは日常の生活の中で、ある日ある街角で、いつもとかわらぬ都市のざわめきのただ中で、ふとこれまで触れたことのないもの、未知なるもの、私の〈遠近法〉にとつて脅威的なものに出会い、自己が解体してゆく危機的な瞬間といったものを経験するはずである。それをあえて旅と呼んだら間違ひだらうか。私は、けつして人生は旅であるなどとセンチメンタルに語っているのではない。反対に、旅に必要以上にロマンティックなものを押しつけてはならぬ、といっているにすぎないのだ。

（中平卓馬「旅を拒みE線上のアリアを唄おう」による）

問八 次の文は本文中に入るべきものである。空欄 から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

問題はしかし、現実になれわれが旅する旅の熊様であるようだ。

問九 傍線部 A 「彼は「自由」という名の不在者である」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 旅行者は行った先の国や地域に暮らす人々に比べて一時的にしかそこにはいないので、その世界との真の出会いが困難である。
- ロ 旅行者は行った先の自然や風俗を自らの興味と憧憬に応じて自由に堪能できるが、そのことにかえって真の自己を発見しにくい。
- ハ 旅行者は行った先の国や地域に暮らす人々とは異なり常にその土地にはいないので、その文化や風俗をじっくり見ることができない。
- ニ 旅行者は自らの興味や好奇心に応じて世界中を自由に移動できるが、そのことにかえって一つの土地や文化をじっくり見るのが難しい。

問十 傍線部 B 「その眼球に不透明なベールをかけられてしまうのだ」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 外国を旅行する写真家は自らのフェティシズムによって自己を再生する。
- ロ 外国を旅行する写真家は自らのロマンティシズムによって自己を解体する。
- ハ 外国を旅行する写真家は自らのディレクタンティズムによって自己と世界を忘却する。
- ニ 外国を旅行する写真家は自らのエキゾティシズムによって世界をありのままに見ない。

問十一 空欄 に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 永遠の傍観者
- ロ 究極の冒険者
- ハ 永遠の移動者
- ニ 究極の挑戦者

問十二 筆者が本文中で「旅」という語に与えている意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 日常とは異なる場所での仮想の生の体験を通して〈私〉が解体し他者へと変貌していく過程である。
- ロ 旅行者だけに与えられた「自由」によって〈世界〉と〈私〉の絶え間ない緊張を獲得する契機である。
- ハ 日常・非日常を問わず未知の物や人との出会いを通してそれまでの自分が新たな自分に生まれ変わる過程である。
- ニ 日常とは異なるもうひとつの〈遠近法〉によって可能になる〈世界〉と〈私〉の新たな関係を経験する契機である。

問十三 本文の趣旨と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 海外の文化や風景を熱心に撮る写真家には、未知の自分を発見しようとする本能的な変身願望に通じるものがある。
- ロ 真の写真家はどこで写真を撮っても被写体との関わり合いから逃げず、自分にも対象にも恐れずに絶えず向き合う。
- ハ 写真家は日常生活や見知った風景の中でさえ旅で同じように見知らぬ物や人に出会い、それまでの自分を脱する機会に恵まれる。
- ニ 海外で写真を撮ってきた写真家が帰国後往々にして気のきいた写真を撮れないのは、旅行者に特権的に許される感傷や好奇心にこだわるからだ。

問十四 傍線部 1・2 のカタカナの部分漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

(三) 次の甲・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲「次の文章は、相良亨『日本人の心』(一九八四年刊)の一節である。なお一部削除した箇所がある。」

「自然観」「自然環境」「自然科学」等々の自然の用法が定着したのは非常に新しく、ほぼ明治三十年代のことである。それまでは、今日われわれが自然と呼ぶものは、「天地」「万有」「森羅万象」A」等々の言葉で捉えられていた。これらにとって代わって、明治三十年代から、「自然」と呼ばれることになったのである。それまで自然は、ほとんど「自然の」「自然に」のように形容詞・副詞として用いられており、「おのずからの」「おのずからに」の意味をもつものであった。「おのずから」という意味をもつ自然で、客体的存在ともいうべきものを捉えることになったのは、日本思想史上の一つの出来事である。それは nature の翻訳語として自然が選ばれたということにもよるが、より根本的な問題は、「おのずから」を意味する自然をもつて客体的存在を捉えることを可能ならしめた地盤としての、日本人の客体的存在の受けとめ方の伝統的な質の問題である。つまり、この出来事そのものが、伝統的な日本人の自然観の質にかかわるものとして問題にされる必要があるのである。

ところで、「おのずから」は語源的に言えば「己つから」であり、「から」は「生れつきの意」であるといわれる(『岩波古語辞典』)。すると、「おのずから」は、もともと或る主語的存在があり、その態様、その動きについて、それが他の力によることなく、その存在に内在する力によってなることを意味するものである。例えば、「天地の自然の妙用」などという用法がある。自然観に関していえば、この天地という主語的存在の様態を示す語であった自然が、主語的存在としての天地自体を意味することになったのである。問題は、このような出来事がいかにして起りえたかということにある。

この問題を解く鍵を、近世の儒者山鹿素行が与えてくれる。彼は「天地生々息々ことなし。たゞ自ら運めて已まざるなり」としつつ、その天地の自然の運動は、具体的には陰陽の運動として展開するとしたが、彼において、天地は元来、「形なし」のもので、すなわち無限定のものであったから、その自然の運動と、その運動のうちに生々する万物において天地は捉えられないことになる。そこでそこから、天地は「自然の全体」であるという捉え方が出てくることになった。ここにはすでに、自然が天地にとって代わる可能性が示されているといえよう。明治三十年代における自然という呼称の定着は、このような背景があつてはじめて可能になったのである。

このように見るのが許されるならば、自然という言葉によって捉えられたものは、もろもろの物であり、その物を生々する運動であるが、さらにこの運動と物との総体としての自然には、かつて天地と捉えられていた無限定な宇宙の究極性とその背景のひろがりとして、そこに見てとられていることになる。したがって、この自然は、主観客観の対立における客体的存在ではなく、むしろ「生ける自然」「大いなる自然」という仕方において捉えられるものである。明治三十年代以降における自然は、一面において nature の訳語であろうとしつつ、他面においては、宗教的自然観などといわれる伝統的自然観を継承するものであったのである。

ところで、明治三十年代の出来事は、「己の自然」の自然が自立して端的に「自然」といわれたことを示している。これは「己のおのずから」の「おのずから」が、自立して端的に「おのずから」といわれることを示している。「己の自然」「己のおのずから」でなく、端的に「自然」「おのずから」と捉えることの可能性を示している。しかし、このように、端的に「おのずから」という時、「己のおのずから」を内包していることは先にも述べたところである。われわれの自然の存在根拠は、無限定な究極的なもの「の、おのずから」であり、その意味をふくむ「おのずから」そのものである。

さらに、ここで思い出されるのは、「日本人の自然観」の代表的なものの一つとしてしばしばあげられる松尾芭蕉(一六四四—一九四)のことである。彼は「造化にしたがひ造化にかへれとなり」(『笈の小文』)で有名であるが、また「水の音・鳥の声、松杉のみどりもこまやかに、美景たくみを尽す。造化の功のおほひなる事、またたのしからずや」(『海法寺図書』)などともいう。『日本古典文学大系』の頭注は、この「造化の功」を「天地創造の神のはたらき」と訳している。比喩的な訳注といえよう。本論に即して言えば、「おのずから」のおおひなるさまということになろう。ところで芭蕉はまたしばしば「静かにみれば物皆自得す」という。「B」としてある物が、また「C」においてあるものとして捉えられているのである。

「おのずから」は、すでに述べたように「己つから」であり、辞書的には同時に「みずから」でもある。「おのずから」と「みずから」は一体的である。だが、単なる辞書的な解釈をこえて、このように「おのずから」あることは「みずから」あることである。唐木順三はかつて、このことを「おのずからがみずからである構造」(『自然について』)と捉えていた。

「おのずから」は、無限定な究極的なもの「の、おのずから」であるとともに、その「の、おのずから」にある物「の、みずから」でもあるのである。いわゆる宗教的自然観の自然はこのような仕方において存在するのである。そして、このような「おのずから」の意味は、自然観と離れてもいえる。端的に「おのずから」という時、それは究極的なものとのかわりにおいて「おのずから」であるとともに、「おのずから」存在としての万物の「みずから」でもあるのである。「D」あることが、実は「E」あることなのである。

乙「次の文章は甲に言及される『笈の小文』の一節である。」

百骸九竅の中に物あり。仮に名付けて風羅坊といふ。まことに羅の風に破れ易からんことをいふにやあらん。彼、狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりこととなす。ある時は倦んで放擲せんことを思ひ、ある時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に闘うて、これがために身安からず。しばらく身を立てんことを願へども、これがために障へられ、しばらく学んで愚をさとらんことを思へども、これがために破られ、終に無能無芸にただこの一筋に繋がる。西行の a における、宗祇の b における、雪舟の c における、利休が d における、その貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見るところ花にあらずといふことなし。思ふところ月にあらずといふことなし。かたち花にあらざる時は夷狄に等し。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

神無月の初め、空定めなき氣色、身は風葉の行末なき心地して、

旅人とわが名よばれん初しぐれ

また山茶花を宿々にして

岩城の住、長太郎といふ者、この脇を付けて、其角亭において閑送りせんともてなす。

時は I 吉野を籠めん旅のつと

この句は、露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初めとして、旧友・親疎・門人等、あるいは詩歌文章をもて訪ひ、あるいは草鞋の料を包みて志をあらはす。かの三月の糧を集むるに力を入れず。紙子・綿子などいふもの、帽子・襪やうのもの、心こころに送り集ひて、霜雪の寒苦を厭ふに心無し。あるいは小船をうかべ、別荘に設けし、草庵に酒肴携へ来たりて行方を祝し、名残を惜しみなどこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覚えられけれ。

注 百骸九竅……『莊子』による。人体を構成する多くの骨と九つの穴、転じて人間のこと。

風羅坊……芭蕉の葉が風にもろいことに通じる芭蕉自身の別号。

四時……四季のこと。

露沾公……陸奥国磐城平藩主内藤義泰の子、義英。俳人。

三月の糧……『莊子』による。長旅に応じた長期の旅支度を言う。

紙子・綿子・帽子・襪……防寒着、頭巾、足袋などの類。

別荘……別荘のこと。

丙「次の文章は甲の文章中に言及される「自然」観に大きな影響を与えた『老子』王弼注の文章である。問題の都合上、訓点を省いた箇所がある。」

其、安、易、持、其、未、兆、易、謀、其、脆、易、泮、其、微、易、散、為、之、於、未、
有、⁵治、之、於、未、乱。合、抱、之、木、生、於、毫、末、九、層、之、台、起、於、累、
土、千、里、之、行、始、於、足、下、為、者、敗、之、執、者、失、之、是、以、聖、人、
無、為、故、無、敗、無、執、故、無、失、民、之、從、事、常、於、幾、成、而、敗、
之、⁶慎、終、如、始、則、無、敗、事。是、以、聖、人、欲、不、欲、不、貴、難、得、之、
貨、⁷学、不、学、復、衆、人、之、所、過、以、輔、万、物、之、自、然、而、不、敢、為。

注 未兆……まだ兆候が現れるまえ。

合抱之木……両腕で抱えるほど幹の太い木。

問十五 甲の文章の空欄 A に入る最も適切な漢字二字の語を、これより後の甲の文章中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十六 甲の文章の傍線部1に「問題は、このような出来事がいかにして起りえたかということにある」とあるが、筆者はこの答えをどのように考えていたのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 伝統的な日本人の自然観では、自然は「おのずから」を意味する形容詞・副詞としてのみ用いられていたが、明治三十年代から nature の翻訳語として「自然」という語に限定されるようになったから。
- ロ 近代化の進展する明治三十年代において、日本人が山川草木を意味する言葉として用いている「自然」が、元来は「おのずから」を意味していた事自体が忘れられるようになったから。
- ハ 日本人の伝統的な自然観のうちに、もともと天地は無限定な自然の運動のうちに生成するものであるという考え方があったことが、明治三十年代における「自然」という呼称の定着を可能にしたから。
- ニ 「の自然」「ののおのずから」がそれぞれ自立して、端的に「自然」「おのずから」と捉えられる過程の明治三十年代において、いつのまにか「自然」と「おのずから」の意味の逆転が起ったから。
- ホ 「おのずから」と「みずから」は本来は一体的であるはずだが、明治三十年代の辞書的な解釈では、「おのずから」の意味が次第に自然からかけ離れて「みずから」と自然が結びつくようになったから。

問十七 甲の文章の空欄 B・C・D・E に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|---------|---|-------|---|--------|
| イ | B | おのずから | C | みずから | D | みずから | E | おのずから |
| ロ | B | おのずから | C | みずから | D | おのずから | E | みずから |
| ハ | B | みずから | C | おのずから | D | みずから | E | おのずから |
| ニ | B | みずから | C | おのずから | D | おのずから | E | みずから |
| ホ | B | おのずから | C | の、おのずから | D | みずから | E | の、みずから |

問十八 乙の文章の傍線部2「この」が示すものは何か。乙の文中より漢字二字を抜き出し、記述解管用紙の所定の欄に記せ。

問十九 乙の文章の空欄 a・b・c・d に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 茶 ロ 書 ハ 絵 ニ 詩 ホ 連歌 ヘ 和歌

問二十 乙の文章の空欄 I に入る最も適切な語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 春 ロ 夏 ハ 秋 ニ 冬

問二十一 乙の文章の傍線部3「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」という思想と、傍線部4「旅人とわが名よばれん初しぐれ」の句に込められた思いとは、どのように関連しているか。甲の文章をも参照しつつ、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 俳諧の道に志す芭蕉は、風雅の根本である四季の美しい風物を楽しむことを目指して、自然を友として生きることを大切としたが、さらに諸道の先人の風雅の生涯に思いを馳せて、旅立ちを決意した。
- ロ おのれなりであることを説く老荘思想に心を寄せて、人為を排する俳風を確立した芭蕉は、さらなる精神の高みを目指して、修行の旅に出ようと準備を重ね、多くの門友と別れを惜しみつつ出立した。
- ハ 自身を無能無芸と顧念した芭蕉は、出離の思いを深め、万事を放擲しあるがままの自然の中で自ら生きることを選び立て、草庵を引き払ったが、盛大な送別の宴が催され、運命の皮肉を思い知った。
- ニ 華やかさを否定し、わびさびの境地に思いを馳せた芭蕉は、あらゆる表面的な美を超越した真実の感動を求めて、造化の根源を追究することを心に秘めながら、人には物見遊山と思わせ一人旅立った。
- ホ 俳諧の道に日夜心を悩ますことの多かつた芭蕉は、そのような生き方に決別し、造化のはたらきに身を委ねて、新たに自らの作風を確立すべく、これまで自分をつないでいた煩悩を振り捨てて旅に出た。
- ヘ あらゆる文芸・芸術の根本は一つである、という考えに到達した芭蕉は、おのれなりの自然体であつてこそ真実の美に気付くことが出来るという信念のもと、諸国の花を求めての放浪の旅を目指した。

問二十二 丙の文章の傍線部 5 は、「これをいまだみだれざるにをさむ」と読む。記述解答用紙の所定の欄に、返り点だけを記せ。

問二十三 丙の文章の傍線部 6 の書き下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 終を慎しみ始に如かば則ち敗る事無し
- ロ 終を慎しみ始に如かば則ち敗るる事無し
- ハ 終を慎しむこと如し始むれば則ち敗る事無し
- ニ 終を慎しむこと始の如くんば則ち敗る事無し
- ホ 終を慎しむこと如し始むれば則ち敗るる事無し
- ヘ 終を慎しむこと始の如くんば則ち敗るる事無し

問二十四 丙の文章の傍線部 7 の現代語訳として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 学ばないということを学び、多くの人々の過ちを繰り返して、万物のみずからそうであることを助け、あえて人為を加えない。
- ロ 学ばないということを学び、多くの人々の過ぎた遣をもどし、万物のみずからそうであることを助け、あえて人為を加えない。
- ハ 学ばないということを学び、多くの人々の行き過ぎをもどし、万物のおのずからそうであることを助け、あえて人為を加えない。
- ニ 学ばないということを学び、多くの人々の過ちを繰り返して、万物のおのずからそうであることを助け、必ずしもあえて人為を加えない。
- ホ 学ばないということを学び、多くの人々の行き過ぎをもどし、万物のみずからからそうであることを助け、必ずしもあえて人為を加えない。
- ヘ 学ばないということを学び、多くの人々の過ぎた遣をもどし、万物のおのずからからそうであることを助け、必ずしもあえて人為を加えない。

〔以下 余 白〕

